

海坂藩の土地

北京大学 对外漢語教育学院 崔 言



江戸から北へ百二十里、石高七万石の「海坂」という小藩。三方を山に囲まれ、北は海に臨んでおり、南は伊波山(『臍曲がり新左』)西は波切山(『冤罪』)、北は荒倉山です(『相模守は無害』)。

城郭は街を流れる「五間川」の西にあり、街中どこからでも顔を上げるだけで美しい天守閣が見られます。五間川の岸辺では密生する桜と柳の木が不気味な気配を引き立たせ合っています。この一帯で嶺岡兵庫が暗殺され(『暗殺の年輪』)、石橋銀治郎が二人の剣士と取っ組み合いました(『秘太刀馬の骨』)。また牧文四郎がふくとその子を護送して船で五間川を下ったとき、里村家老一派の追っ手をかかわしています(『蟬しぐれ』)。

歓楽にふけりたければ染井町は美酒と美女で知られる花街。存分に美食を満喫したければ三屋清左衛門のひいきにする「涌井」というお店があります(『三屋清左衛門残日録』)。清貧な井口清兵衛は慌ただしく初音町で豆腐とネギを買って帰り(『たそがれ清兵衛』)、食事の支度をしていました。

時代小説家の藤沢周平がこの架空の北国の小藩を背景として創作した一連の小説はのちに「海坂もの」と呼ばれ代表作となっています。向井敏が小説の評論を一冊にまとめて『海坂藩の侍たち』と名付け、自身も有名な作家である親友、井上ひさしも『海坂藩への感謝』と題した弔辞を読んでいます。

「海坂」という名前は実は「藤沢周平」よりも早くから存在していました。作家の本名は小菅留治といい、湯田川中学の教員でしたが、肺結核にかかって入院したとき知り合った友人に俳誌『海坂』を紹介され、投稿を促されたのです。「海辺に立って一望の海を眺めると、水平線はゆるやかに弧を描く。そのあるかなきかのゆるやかな傾斜弧を海坂と呼ぶと聞いた記憶がある。うつしい言葉である」(『小説の周辺』)。「うなさか」とはかなり古い言葉で、『古事記』では、豊玉姫が海の国に帰るシーンに登場します。漢字では「海境」、「海界」とも表記され、凡人と海の神との境界を指しています。

当時は肺結核は重病だったため、療養所はさながら生と死を区別する境界線のようなものでした。たとえ全快しても、患者が順調に社会復帰するのは難しく、小菅留治の教職復帰申請は拒絶されてしまいました。しかし療養中に句作や文学作品の鑑賞に勤んでいたことが、のちの作家人生の基礎となります。あの海と空の交わる弧を越えて、もしかすると新しい世界へ。死と隣り合わせの無常な人生、病友との助け合いのすばらしさ、社会復帰する淡い望み、文章を書き始めようという考え、すべてが「海坂」に含まれています。

彼は随筆の中で、海坂藩は郷里の庄内藩一帯がモデルだと述べています。海坂ものにちよくちよく出てくる庄内の料理、方言、風俗などがこの架空の藩に現実味を注ぎ込みました。「写実性つまり現実味を加えても決して物語のフィクション性を薄めはしない。」「人は社会、家庭、血族のいざごに縛られる……私の小説の主人公もそうした様々な制約を与えられたため、虚構の中でリアルに生きられる。」(『自作の隠し剣シリーズを読み返して』)

では、リアルさを求めるのに何故こうした藩を作り上げたのか、ないし、どうして現代小説を書かなかったのでしょうか。作家自身が、今の人情を書くには時代小説が一番で、現代小説だと照れてしまっただけで書き始められないと述べています。他方、時代小説も完全な空想にはできないもので、現代と何のつながりもなかったら古くさくなって耐えられません。(1992年の岡崎満義との対談)。

これらの陳述の背後にあるのは、作家の「距離感」のほど良い把握です。つまり当事者は戸惑いを避けられないため、落ち着いて書くにはある程度の距離を置句必要がありますが、あまり疎遠にすると空想に成り果て、現代の読者と通じ合いにくくなってしまいます。

多くの読者や評論家が海坂藩視は藤沢周平が創造した「日本人の心の理想郷」だと見ています(井上ひさし、松田静子、杉本章子、関川夏央ら)が、こうした評価は辺鄙な北国の小藩にはおよそ似つかわしくないものです。まして一般的な意味でのユートピアと違うのはなおさらで、海坂藩は至る所に現実的な束縛があり、小説の主人

公は主に下級の藩士のしかも家を継ぐ長男ではなく前途の薄暗い次男、三男で、そこに晩年のご隠居と貧しい貧乏な家の女子……

しかし、本当に豊饒な土地はまさにこのような姿なのではないでしょうか。ただ単調な幸福だけを生産し、勝者の歴史を書くのではなくて、多様な暮らしを育んでいるのです。これらの下層にいる人物は最も地に足がついており、運命の束縛を背負っていても自己の意志を保ち貫いて、誠実に生活していけるのです。秋は麦が穂を垂れ、冬は雪で真っ白になり、春は花が鮮やかに輝き、盛夏には大樹の枝葉の間からけたたましく蝉の声がほとばしり、生命の感情の叫びをいっぱいを含む四季の辛酸をしばしば経験してこそ格別にすっきりして見えるのです。

読者が憧れを抱くのは一人や二人の完璧な人物や数本の偉人伝ではなく、この深く含みのある土地なのです。古今の隔たりを超え、架空と現実の境界線を渡り、手を伸ばして書物のページの中からひとつかみ海坂藩の土を掘り出すと、そこからわずかな人生の悲しみや楽しみのすがすがしい香りを嗅ぎ取れます。歳月の流れに磨き上げられた質感に触れ、肅然と失望を感じるのです。¹

注:

「海坂もの(海坂藩を舞台とした小説)」の範囲は定義により異なります。『海坂藩大全』には「海坂藩」、「五間川」、「染川町」のいずれかが明記された作品が収録されており、阿部達二は3つのやや厳格な判定基準を採用していますが、向井敏は藩名が明示されていない『三屋清左衛門残日録』や『風の果て』なども含めています。作家の創作時期によっていくつかの細かい設定が調整されいるため、本文では広義のものを採用し、諸評論家が海坂藩を背景だと考えている作品をすべて海坂ものとしています。

参考文献:

小説の周辺、文春文庫、1990

ふるさとへ廻る六部は、新潮文庫、1995

「蝉しぐれ」と藤沢周平の世界、文藝春秋、2005

藤沢周平と荘内、ダイヤモンド社、2007

海坂藩大全、文藝春秋、2007

「蝉しぐれ」の世界、鶴岡市藤沢周平記念館、2011

「海坂藩」のふるさと、鶴岡市藤沢周平記念館、2015